

いのちの授業 見つけた！

神奈川県公立学校における「いのちの授業」アラカルト

「小中学校篇」

いのちの誕生

日が出始めたばかりの早朝の小学校。教師が今朝産卵されたばかりのメダカの卵を1個ずつ丁寧に磨き、それをケースに分け入れています。各ケースにはひとりずつ、5年生の名前が貼ってあります。

このケースはこの教師が自分で考案しました。持ち歩くこともできて、そのまま顕微鏡で観察できる優れたもの。実はフロッピーディスクのケースに、水が漏れないように小さな袋を入れたものです。



この子たちは今日から自分の卵を自分で管理して、毎日観察します。アクシデントがあっても大丈夫。理科準備室の入り口には『メダカ診療所』という看板が掲げられています。

この授業は1時間目でなくてはなりません。この授業の噂を聞いた保護者も朝から来ています。今まさに細胞分裂を始めたばかりの卵を観察するのです。それは、ひとりに2つずつ、先生から飼育を任せられた自分の卵。

この子たちは、今日から毎日、命の不思議を記録することになります。言い忘れましたが、この教師はこの子たちの校長先生です。

いのちのありがとう

ある小学校の教室の後ろに、「ありがとうという言葉」という模造紙が貼ってありました。ハート形のカードに「A奈さんへ えんぴつけずりをかしてくれてありがとう B太より」などと書かれています。まだ新学期5日目なので、少ししか貼ってありませんが、もうこんなのがありました。



「C奈さんへ すぐなかなかおりしてくれてありがとう D太より」

新学期早々けんかしてしまったのですね。

そのD太さんへ、別の子が感謝してるカードがあります。

「D太さんへ C奈さんとけんかをしてなかなかおりをできていてありがとう E奈より」

E奈さんは、第三者ですが、二人が仲直りできたことについて当事者のD太さんに感謝している。

このカードは、さりげなく貼って、読みあって、それで感じ合う。とっても素敵なアイデアです。中には書いた人や書かれた人にもっと事情や気持ちを聞いてみたくなる「ありがとう」もあります。お互いが受けとりあい、分かり合うこと。そうした関係ができていくことは、いのちの基礎です。

いのちは大切な「たからもの」

「たからもの」

45分間の道徳で、小学校1年生の脳裏に印象づけられたキーワードです。

(ハムスターの)おかあさんが あかちゃんを 口にくわえているよ
あかちゃんを そっとかんでいるみたい
まるで たいせつな たからものを まもっているようだね



黒板は主にチョークで書きましたが、このキーワードだけ、紙に書いて用意してありました。教師は、初めから、このキーワードを子たちに残したいと考えて準備してきたのです。

週一回だけの道徳。授業のあとに何が残るか。何を残すか。

後半、全員にお母さんからの手紙が手渡されました。教師が全員の保護者に頼んで書いてもらった「あなたが生まれた時のこと」。みんな真剣に読んでいます。

「じゃあ、最後に、〇〇くんのお母さんのお手紙、読ませてもらおうかな。」

「よんで!」「えー」「どんなんだー?」

「・・・とても小さいけれど、元気に生まれてきてくれたことが、とてもうれしくて、涙があふれました。小さな手を握り、寝顔を見ているだけで、優しい気持ちになりました。〇〇くんは、ずっとママのたからものです。ママの子に生まれてきてくれて、ありがとう。」

「『たからもの』だって」「ハムスターと同じだ」「ありがとうだって」

授業のあとに何が残るか。何を残すか。

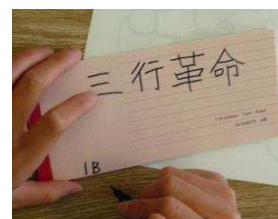
授業を終えて、子どもたちの小さな手には、一通のたからものが握られていました。

いのちの三行革命

この中学校の『三行革命』は全クラス必須のアイテムです。全員に3等分に切断されたノートが配られ、毎日三行くらい書いて学級担任が返事を書きます。まず、その子のいのちを「受けとる」こと。

この子の見たこと、聞いたこと、やったこと、思ったこと。まず、この子を受けとること。

そのためのひとつのアイテムです。本当は、隣りに座ってゆっくり話したいのだけれど。



そんなに濃い文を期待しているのではありません。3行でもいい。1行でもいい。教師はまず、受けとるのが仕事。この先生は受けとってくれる。子どもがそれを感じられれば、このアイテムの目的はひとまず達成。

「この教師は受けとってくれるんだ」と感じられれば、その子は授業にも乗ってくる。自分を出してくる。受けとってくれる人がいるから、自分の気づきや考えを差し出したくなる。

そうした関係は、少しずつ、日々作られてくるものなので、三行革命。

誉めるのではなく、諭すのではなく。

私はあなたのいのちの「ちょっとここ」受け取りました。

いのちのメッセージ展

この中学校では、「生命の尊重」というテーマのもと、生徒会の保健福祉委員会を中心に「かけがえのない生命のことを伝えたい」という講演会と、理不尽なできごとで亡くなった方々の人型(メッセンジャー)や遺品、遺族の言葉を展示した「生命のメッセージ展」を行い、「いのち」の大切さを実感しました。



いのちをつなぐ

この中学校では、地域から助産師さんをお呼びして、卒業を前にした子どもたちに「いのちの授業」を行います。

「私たちはなぜ生まれてきたのだろうか?」「それは生きるため。」

人が生まれてくるまでの道筋は奇跡の連続で、この世に無駄な命なんて無いことが、助産師さんのお話から伝わってきました。中学校からの旅立ちにあたり、子どもたちはそれぞれの目標を強く胸に刻みました。

「高等学校篇」

いのちの交流

高校3年生が、小学校の4年生が行う「10歳を祝う会」に協力しました。この高校では、総合学科教育を推進するために、あらゆる場面で体験を通じた学びの場を設けています。

その一環として、今回、近隣の小学校の4年生が行う「10歳を祝う会」の事前の学習に、高校の3年生が協力することになりました。

健康福祉系列科目「いのちと健康」で学んだことを生かし、いのちの大切さ・健康であることの大切さなどを伝えます。内容は、家系図による「いのちのバトン」やライフステージ「10歳から18歳」について説明し、ともに考え、実際に作成し、その思いを共有しました。

いのちのふれあい動物教室

高校の畜産科学科の生徒が小学校へ行き、動物とのふれあいのお世話をしました。

日頃から校内施設の一部を開放しているこの高校では、農業高校らしい地域貢献デーができないかと考え、平成18年度から地域の小学生などを対象に「ふれあい動物教室」を行ってきました。近年鳥インフルエンザ等の関係で、動物を飼育する小学校や幼稚園が減っているという話を聞き、命の大切さを教えるには、まず動物と触れ合うことが大切という考えによるものです。この日は、日頃は見ることしかできない動物を触ることもでき、また、畜産科学科の生徒が動物の話をする時間も設けました。

今年は、小学校の1年生が100名近く、ふれあい動物教室に参加してくれました。

いのちの対話集会

高校の体育館に精神科医の先生を講師に招き、「こころと命の対話集会」を開催しました。

近年の社会や教育現場が抱える問題として、不登校、摂食障害、自傷や反社会的行為など、心に問題を抱えている児童生徒が数多くいることがあげられます。思春期の後半を迎え、周囲の期待と自分の力とのギャップ、将来への不安、友人や親との関係など様々なことでストレスを抱え、周囲に打ち明けることもうまく対処することもできず、悩みを抱えている生徒は少なくありません。

この対話集会の企画は2年前から行われ、学力向上進学重点校として真の文武両道を促進するうえで、「生活習慣の確立」や「こころの教育」を重視した取組が不可欠との考えに基づいて構想が練られたものです。また、前述のように、生徒それぞれが抱える悩みや問題を共有し、高校生が抱える特有のこころの問題について専門家を交えてともに考え、理解しあう時間を持ちたいとの思いから計画されました。

精神科医の先生との事前の打ち合わせや当日の司会進行は、企画段階から主体的に準備を進めてきた【思いやり委員会】の生徒がつとめ、精神科医の先生の基調講演が行われた後、先生に対する質疑応答の形式で「対話」が行われました。



「特別支援学校篇」

いのちと触れ合う

知的障害教育部門の小学部では、移動動物園でウサギやリスなどの小動物と触れ合う活動を行いました。小動物に餌をあげたり、直接触ったりすることにより、いのちの大切さや思いやりを学びました。

動物とのかかわり方がわからずに取組みに消極的であった子どもが、指導員や教師のお手本を見たり、声かけを受けたりすることによって、動物の温かさ、動物が喜ぶかかわり方を知り、とても生き生きとした表情を見せてくれたことが印象的でした。

いのちの自立

肢体不自由教育部門と知的障害教育部門の併置校では、給食の時間に交流を行っています。

知的障害教育部門の子どもたちは、肢体不自由教育部門の子どもたちが、鼻から通した管から栄養をとっている場面や様々な食形態の食事をしている場面を見て、食べるということが、楽しむということであるととも、いのちをつなぐ大切な役割を担っていることを実感し、生命の維持や健康状態の維持について理解を深めることができました。

また、肢体不自由教育部門の子どもたちは、活動量の多い知的障害教育部門の子どもたちとのかかわりを通して、自らの体調管理の大切さを知り、自らの病気や障害への理解を深める機会となりました。

いのちの輝き

知的障害教育部門高等部の生徒は、生きる力をつけることを目指し、企業や福祉施設等において現場実習・職場実習に取り組んでいます。

働くということが、誰かの役に立っているという実感を得ることで、自分が社会に貢献できる存在であるという自尊心をはぐくむことができ、生き生きといのちを輝かせる生活へと結びつける機会となりました。



いのちのバトンリレー

知的障害教育部門の高等部では、「いのちのバトンリレー」という題材で学習をしました。家族の写真を持ち寄り、家族のどんな部分を受け継いだのかという「からだバトン」を知ることや、自分の名前の由来や家族の子どもに対する思いについてのアンケート結果を発表し、自分が大切に育てられてきたことを実感する「思いのバトン」を知ることにより、いのちの尊さを理解する機会となりました。

生活の授業では、校内の畑で野菜を栽培し、収穫したものを加熱調理して口にすることで、自分たちはいのちをいただいて生きているということを学びました。野菜が苦手な子どもが、自分が栽培した野菜だからということで、口にすることができるようになり、偏食を減らすことができたなどのエピソードもありました。

また、育てた花から取れた種を翌春に蒔いて芽が出たときには、いのちのつながりを感じることができました。

いのちの授業 見つけた！

「幼稚園篇」

かながわ「いのちの授業」 今回は、幼稚園からの投稿です。

初めての避難訓練

4月18日(水)に、火災を想定した避難訓練を実施しました。新入園児にとっては、初めて聞く大きな非常ベルの音です。今年度から3歳児もいるので、大きな音に驚かないように、予告をしてから鳴らしましたが、やはり非常ベルが鳴り響いたとたんに「怖い～！！」と、泣き出す子がいました。

それでも最後は、防災クッションのかぶり方を教えてもらい、上手にかぶれると、なんだか嬉しそう？！



3歳児の様子

実際の有事に備えて、地震の想定や不審者対応の防犯訓練など、これからも毎月取り組んでいきます。

「泣いていると先生の声が聞こえなくなっちゃうよ！泣かないで、先生と一緒に、急いで逃げようね！大丈夫、みんなのことは、先生が守ってあげるから！」

3歳児も先生の話に神妙な面持ちで聞いていました。命を守るために大切な約束です。



4歳児の様子